

何年か前、テレビを偶然見ていたら、ヒマラヤの雪にとざされた中にあるジャングリアとかジャングレラとかいう仮想の王国の物語りを、宝塚の何とか組がやっていた。確かに、ネパールといい、シッキムといい、またブータンやカシミールといい、ヒマラヤの山中には、風景も文化様式も、私たち日本人にとっては、恐ろしく異国的な世界がある。

空には飛行機が飛び、カトマンズには近代的ホテルの建設が進められているといっても、ネパールの大部分は昔ながらである。人々は徒歩で何日もかかって旅をする。1週間や2週間歩くことは、帰省する大学生にとっても、山と平地の物産を交換するキャラバンにとっても同じことである。

しかし、飛行機から見たヒマラヤの山々は、そんな生活が本当にあるのだろうかと考えさせる。あまりにも速く、あまりにも便利だからだ。でも、バクタプールの街はずれなどで、多くの人が天秤棒をかつきながら歩いているのを見ると、そこにはまだ過去が生きているのを、この目で見ることができるのだ。

キ ャ ン パ ス の 花

貝 山 久 子

先日、会計課へ行った帰りに家政学部の校舎の前を通ると、沈丁花のつぼみが大分ふくらんでいるのが目についた。ここの沈丁花は校内のどの沈丁花よりも早く開花し、かつ美しい。思うに陽当りのよい校舎と、舗装道路の輻射熱をうけるからであろう。それに較べてあわれを止めているのが別館前の沈丁花である。昔は手入れが行き届いて、おびただしい花をつけたものであった。そうしていつも3月25日の卒業式のころにはまっさかりであったように思う。卒業生の謝辞にも、在校生の送辞にもこの花のことが冒頭に出て来たものであったが、やはり戦後次第に東京が温暖になって来ているのであろう。家政学部が建つ前は、ここにキャラメル廊下と呼ばれる渡り廊下があって、その外には数本のこぶしの大木が、雪のような、としか形容のしようのない花をもりあがるようにつけた。それが入学式のころで、白い花の下で何とはなしにふるさとを思ったものである。こぶしは花のあとの若葉の美しさが又すばらしかった。グランドの中程に一株の連翹があって早春の日あざやかな黄色の花を開く。はじめて上京した年ゆくりなくこの花をみて、一どきに望郷の念にかられて涙ぐんだのを思い出す。少女時代をすごした朝鮮では、長くて寒い冬の沈黙を破って春のおとずれをもたらすのはこの花で、それを追って桜も梅も桃も李も一せいに咲いたものであった。木蓮は高校の裏とプールの脇にある。こぶしのにぎやかさにくらべて、ひっそりといつの間にか咲いて、いつの間にか散ってしまう。現在の理学部、昔の体育館の裏に乙女権が沢山並んでいた。あまり好きな花ではなかったが七重八重のピンクの花が、つやつやした

葉の間からのぞいて可愛らしかった。終戦の年の4月10日、今の中学の場所にあった第二寄宿舎が焼けた時も、乙女椿が咲いていた。染井吉野も何本かあるが、やはり乙女椿のそばに、うこん桜というあまり見かけない桜があった。うこん色ともいえない薄緑色のような花をつけるのだが、きれいでないので、つつい見落してしまうことが多かった。グラウンドと中学の間にある八重桜の見事さは、本当に春らんまんというべきもので、出来れば緋毛せんでも敷いてすわっていたい位であった。この八重桜も近年老令のためか又は排気ガスのためかあまり咲かなくなってしまったのはさびしい。

こぶしでなくても若葉の美しさは花の美しさにまさることがある。山の上へ行くスロープの右側のゆりの木、史学科と国文科の窓下の梧桐の若芽の美しさは又格別で、てたばかりの小さな葉が、大きな葉と同じ形をしているのは当然のことながらほほえましい。梧桐は夏になると童話にでてくるお姫様の舟のような、まわりに丸い種子をつけた舟型の実が群がってつく。久しく花をみたことがなかったが、昨年うすいオレンジ色の小花が叢状についているのを発見した。春から夏のうつり変わりの間に、高校の視聴覚室の窓下のぼたんが咲く。花の女王ともいうべきあざやかさが毎年絵筆をとっていらした天井先生のお姿はみえず、年々歳々人同じからずの感がする。中学校の窓下のえにしだが一しきり咲いた後は、生協わきのつつじも色とりどりに美しく、さそわれて護国寺のつつじを見に足をのばしたくなる。つつじが終るとさつきが咲く。テニスコートわきの倉庫のはじめに大きなニセアカシヤが1本あって5月に房状の白い花をつける。これは京城の小学校の校庭に沢山あったのと同じもので、少女の日を思いおこすよすがとなる。

梅雨の花はあじさいである。別館前、学内寮前の並木は見事で、あまり好きな花ではないが雨に打たれているのは冴え冴えと美しく、中でも図書館への階段の中程のものはり色が一きわあざやかである。私はむしろ素朴ながくあじさいの方が好きで、学生課の窓下のをながめるのがたのしい。あじさいが終るところキャンパスは夏休みに入ってしずまり返ってしまう。紙数もつきたので、夏から冬の花は次にゆずりたい。

ある老兵の随想

福井英一郎

渡辺先生よりも1年お先に昨年の春、長い間の古巣であった東京教育大学を退任して早くも1年近くになったが、晩年になっての月日のたつのは異常にはやく感ぜられるもので、あたかも地平線に近づいた太陽のように、正に加速度的といってもよいであろう。これには勿論戦後の日本社会の、目まぐるしいほどの変化や急速な経済成長もその一因で戦争を境にしてその前後では、実に明治維新当時をはるか